

落語に関わること

高取 弘子

落語と歌舞伎

落語「らくだ」、三遊亭円朝作の怪談噺「乳房榎」と人情噺「文七元結」等、落語が基となる歌舞伎の演目が多々有ります。同じ筋書きを噺家の語り、かたや歌舞伎座の大舞台・装置、相応しい衣装の芸達者な役者が織りなすお芝居。木戸銭四〇〇〇円と入場料一八〇〇〇円（下世話なこと）。

歌舞伎の「文七元結」、主人公の左官屋長兵衛さんの配役一押しは亡き十八世勘三郎さん、他に玉三郎さん、扇雀さん達でめでたし、めでたし、幕でした。

落語で何人もの噺家さんの「文七元結」を聴きましたが、年末の柳家三三師匠、抜群でした。

感動や、怪談噺での恐怖感、実は落語の方が大きいです。お芝居は役者の熱演が「観たまま、聴いたまま」に素直に心に響き、その世界にいざなってくれる。

落語は噺家の技量が聴く側の想像力を刺激し、感動をいやが上にも掻き立てます。聴く手の知識、経験で自らの感動を倍増して獲得出来るのです。昔に観た歌舞伎の舞台名場面が脳裏に浮かんたりして。

「乳房榎」の恐怖感の比較のこと、打ち上げの席で三三師匠に伺いました。師匠は「時間の関係もあり、クライマックスを凝縮して話しているし、受け手の思いが加わるから」と言うようなことを解説してくださいました。

噺家と女性感

噺家による違いは多々有りますが、女性感の違いからのごとくに特化して……。

「芝浜」は年末にしばしば演目となる、財布を拾ったのにおかみさんに夢だと嘘をつかれて、お酒を断ち、懸命に仕事に励んだ魚屋さんの噺。立川談志師匠が天下一品との定評が有りますが……。

私は立川談春師匠で泣きました。噺家の女性感の違い（？）でしょうか。談志さんのは、おかみさんを所有物みたいに扱い接する旦那さんがちよつと不愉快。嘘が発覚した時の魚屋さんの怒りの様子、おかみさんの「許して、怒らないで、捨てないで（これはあったか？）」のセリフ。最後はおかみさんに感謝していたようではありませんが。

それに対し、談春さんの語り口には、旦那さんはおかみさんを怒りはするものの、女性への尊厳が有ります。

談春さんの「紺屋高尾」。染物屋の奉公人の久蔵は花魁道中の高尾太夫を見初め、三年間必死に働き貯めた十両で逢うことが叶ったが、次に来るのは三年先、身分と成り行きを明かした。気が付いていた高尾は感激し、来年の三月十五日の年季明けに女房にしてくれと切り出した。その後所帯を持ち、紺屋を繁盛させた……という人情噺。久蔵と花魁の純な心、涙無くしては聴けません。

女性限定の談春独演会では多くの方が泣いていました。何故か、他の噺家では泣けない、のです。